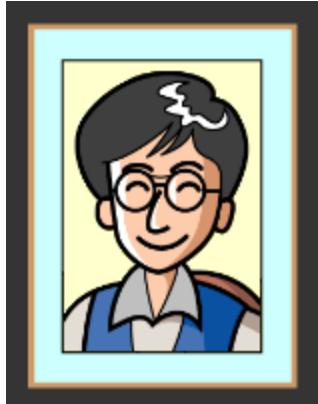


ま た 会 え る い ま 会 え る

ウチのとうちゃん、どこ？

ところ ひとり
むかし、むかし、ある 所 に一人のおばあさんがいました。

そのおばあさんは、まだ子どもが幼いとき
に、連れ合い（ご主人）に先立たれます。



えん てら
そして、そのことがご縁となって、お寺にお
まい ねんぶつ おし じょう ど
参りするようになり、お念佛の教え（淨土
しんしゅう おし で あ
真宗の教え）に出遇われました。

「うちやんとは、この世限よ
りのご縁えんじやなかつた。
やがてまた、仏さまの国ほとけ
(お浄土)で、必ず会わ
せていただける。

そして今も、「ナンマンダブ
ブ、ナンマンダブ」のお念ねん
仏とともに、私のところへ
かえつてきてくれてゐる。
ナンマンダブ…



ねんぶつ ひぐら おく いっしょ お
と、お念佛の日暮しを送られ、一生を終
えられました。

じょうど う
お淨土に生まれたおばあさんは、すぐに、懐かしいご主人
（とうちゃん）をさがします。

しかし、ご主人の姿は、お淨土のどこにも見当たりません。

あれ、おかしいな。
ウチのヒヅチちゃん
は、ビビリこむの
だね!!...
「ヒヅチ（お漁士
じゅうし）^あ
で）また会える
と囁かせてもらひつ
ていたの!!...。



ちょうどその時です。おりしも、阿弥陀さまが近くを通りかか
られました。

おばあさんは、矢も楯もたまらず、阿弥陀さまの袖を引っ張つてたずねます。



あのう、
阿弥陀さま、
ウチのとうち
やんは、
どこにいるの
でしょうか？

と あみだ ほほえ
おばあさんの問いかけに、阿弥陀さまはニッコリと微笑んでお
っしゃついました。

ばあちゃんや、アレ（とうち
やん）はね、
ワタシだった
んだよ



はなし きんじょ せんぱいじゅうしょく き
こんなお話をご近所の先輩住職さんが、お聞かせくださいました。さて、これはいったい、どういうことでしょう？

あみだ
ウチのとうちゃんが「阿弥陀さまだった」ということは、
あみだ すがた
「阿弥陀さまが『ウチのとうちゃん』という姿となって、はたらいていてくださっていた」ということになりますね。

さき だ こ みちび
先立つ子に 導かれ...

へいあん じ だい じよりゅう か じん ゆうめい いづみしきぶ まなむすめ
あの平安時代の女流歌人として有名な和泉式部は、愛娘
さき だ いづみしきぶ まなむすめ な とき きも
に先立たれています。和泉式部は、愛娘を亡くした時の気持ち
こか たく なげ
を古歌に託して、嘆かれたといいます。

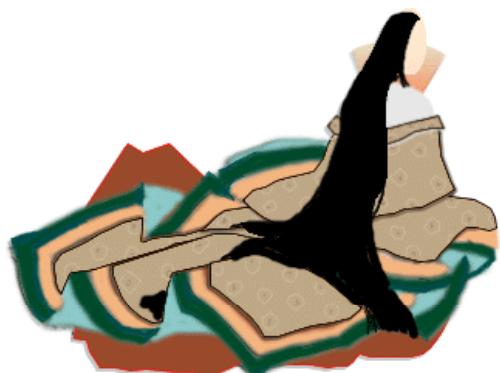
帰りこよかし 道知れぬとて 死出の旅たび たどり行くらん 子は死にて



な こ おも しんぱい おやごころ うた
まさに亡き子を思い、心配する親心いっぱいの歌です。

いづみしきぶ ほとけ おし ぶっきょう で あ
ところが、その和泉式部が、仏さまの教え（仏教）に出遇
うた か
って歌が変わります。

子は知識なり 教えて帰る 身を知れと あだにはかなき 夢の世に



この「子は知識なり」の「知識」とは、仏教語で「正しく導いてくださる方」という意味です。

つまり、「先立った我が子が、自分の命をかけて、『お母さんの人生、大切に生き抜いてください』と教えて、仏さまの国（お浄土）へ帰っていった」と歌を詠んだのです。

生きてください。
だからこそ、大切に
生きてください。
るのです。
ばならない死しが
必ず迎えなけれ
ばならない死しが
命いか
なのですよ。
らなのが、命いか
いつ終わるか分わ
わからぬのか
母さん、これでも
わからぬの？



和泉式部は、愛娘の死を通して、「よその子が死んでも、他人事にしか思わないこの私のために、今あの子は、私の子として生まれ育ち、先立って、真実を教え知らせようとしてくれた仏さまだった」といただかれたのです。

「ウチのとうちゃん」も、おばあさんのご主人として連れ添い、苦楽を共にした日々を経て先立ち、おばあさんをお念佛の教え（浄土真宗の教え）に遇わせて、お浄土へと導いてくださった『おばあさんにとっての仏さま』だったのです。

「よそのとうちゃん」なら、こうはいきません。

わ い がい み な わ ぼ さつ 我れ以外、皆、我が菩薩なり

いま じょうど おうじょう
今、このことを「お淨土に往生した
あと い とき
後ではなく、生かされているこの時に
き いみ
聞かされたことに意味があるのだ」と
わたし おも
私は思います。

あみだ なもあみだぶつ
阿弥陀さまは、南無阿弥陀仏のおよび
ごえ とき
声となって、そして時には、「さまざ
まな人」や「菩薩」となって、苦惱の
しゅじょう すく
衆生を救ってくださいます。

わたし すがた
それは、私にとって「やさしい姿」であることもあれば、
とき きび すがた
時には「厳しい姿」であったりもします。あるいは「憎まれ
やく わたし しんじつ みちび そだ
役」になって、この私を「真実に導き、育ててくださる」
こともあるでしょう。

しんらん しょうせつ なだか さっか よしかわえいじし わいがい
『親鸞』の小説で名高い作家の吉川英治氏は、「我れ以外、
みな わし い ねんぶつもう じんせい
皆、我が師なり」と言わされたそうですが、お念佛申す人生では、
わいがい みな わ ぼさつ
「我れ以外、皆、我が菩薩なり」といただくことができるでしょう。

なひとえん ぶっぽう あ あ せかい
亡き人をご縁に仏法に会うとき、また会える世界があること
し で あ
を知らされます。いや、「すでに出会っていた」のでした。

いま わたし いっしょ
そして今、『ナモアミダブツ』となって、私といつも一緒に
あゆ 歩んでくださっているのです。

じんせい まく お じょうど おうじょう
やがて、人生の幕が降り、お淨土へ往生させていただいた
あみだ
とき、阿弥陀さまがおっしゃってくださるのでしょう。

『アレはね、ワタシだったのですよ』と。

